

報いのない報い

李 元 重

奨励者紹介紹介[リ・うおんじゅん]

同志社大学神学部嘱託講師

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

(ルカによる福音書 14章12—14節)

世界一高い食事

皆さんが覚えている一番高いお食事は、大体おいくらのものでしたのでしょうか。それは、どこで何を食べ、そして誰とのお食事でしたか。世界第4番目の大富豪と言われる、パークシャー・ハサウェイのCEOウォーレン・バフェットさんは、毎年自分とお昼と一緒に食べる機会を eBay オークションに出しています。落札者にとっては彼と一緒に食事ができるだけでなく、株や投資相談はもちろん、人生に対するさまざまなアドバイスをもらえる機会にもなります。1人でもよいし、7人まで一緒に参加することもできるそうです。今年は、暗号通貨の会社 Tron の若手CEO Justin Sun (28歳) という人に落札されました。そのお値段は、なんと456万7888ドル、日本円にするとおおよそ5億円の金額です。ただ1回のお食事に5億円を費やすとは、やりすぎではないかと思われるかもしれませんが、今までそのオークションにビディングして落札した人々は、それをある意味では自分のビジネスのための投資の一つとして、ウォーレン・バフェットと食事をしたという名誉として、それなりの価値があると考えていると思われます。

イエスが招かれた食事

今日読んでいただいた聖書箇所は、イエスがある身分の高い人から食事に招待されたことが背景にあります。具体的にどのような催しかは知ることができないのですが、多分イエスを招待した人は、独自の教えを広げ、さまざまな活動で名声が高まっているイエスを招待することによって自分の名誉をより高くすることを狙ったのかもしれませんが。

およそ2000年前、イエスが生きていたユダヤ人社会では、食事を共にするというのは格別な意味をもっていました。それは一緒に食べることによって結束力を強め、同僚として、仲間として、信頼関係を築くものであります。特に食事に招待するというのは、お互いに光栄を与える行為であります。このレベルの人が家に来た、わたしもそれぐらいの人である、ということになりますね。招待された人も、恩返しでその人を自分の食事に招くことによって、また自分もそれぐらい寛大な人であるということを示すことになります。つ

まり、互恵的な関係が作られるわけです。別に、2000年前まで行かなくても、今の我々も同じことをやっていますね。あまり深く考えずに誰とでも一緒にご飯を食べる場合がないわけではありませんが、あまり親しくしたくない人とは無理矢理にご飯を食べたくはありません。しかも、誰かをわざわざお家に招いて食事をするのは、その人が好きだから、あるいはなんらかの関係を作りたいから、お礼をしたいからなど、一定の相互性をもつのが当然です。イエスを食事に招いた人も、イエスに対してなんらかの好意をもってイエスを招いたはずです。

イエスの「反」常識

しかし、イエスはそのような常識を覆すことを言いました。12節をもう1回読みます。「また、イエスは招いてくれた人にも言われた。『昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである』」。友人、兄弟、親戚は、我々と親しい人々です。そのような人々と食を共にするのは、何の問題でもないし、極めて自然な行為でしょう。近所の金持ちも、わたしが困った時、助けてくれたかもしれないし、もし今度何かあったら力になってもらうかもしれない。このようにして良い関係を作っておくのは、むしろ賢明な措置だと思われます。

しかし、イエスはこのような常識を全く無視します。つまり、そうした我々に有益をもたらすような人々を食事に呼んではならない。むしろ我々が宴会を催す際、呼ばなければならない人々は、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人であると教えておられます。ひとまず誤解のないように説明させていただきますと、我々と親しい人を呼んではいけないということは、そのような人々を食事に招いたりすることを絶対にしてはいけないという意味ではありません。今日の聖書箇所以外では、イエス自身も友人の食事に招かれたことが何回もありました。それは、古代セム語の慣用句の一つとして次の内容を強調するための表現であります。それにしても、イエスがあえて強調して、呼ばなければならないという類の人々の意味をより深く知ると、やはり「なんで？」という疑問をもつことになります。日本語の「貧しい人」と翻訳された *ptokhos* ($\pi \tau \omega \chi \acute{o} \varsigma$) の意味は、現代日本社会で、「豊かではない」「十分な収入がない」というような意味ではありません。生きるためには、他人に頼るしかないほどの貧しさ、物乞い、そして場合によって非常に劣等な存在を意味します。「体の不自由な人」と翻訳された *anapeiros* ($\alpha \nu \acute{\alpha} \pi \eta \rho \omicron \varsigma$) という言葉も、生涯不具になるほど傷ついた人のことです。その上、足の不自由な人と目の見えない人、それらの人々の共通点は、当時のユダヤ社会で最も疎まれた人々であったということでした。そのような人々に食事をもてなしても、何の得もありません。宴会の催しだったら、その雰囲気がおかしくなるはずです。彼らはただ食べて、飲んで帰るだけで、こっちに返されることは何もありません。しかも、そのような人々がわたしの家で食べたということは、わたしもそのような社会の底辺にある人々と同じ類の人と見られる可能性もあります。自分と自分の家の評判が落ちることになります。イエスは一体何をおっしゃっているのでしょうか。

報いのない報い

我々に、なかなか理解し難いところがもう一点あります。それは、14節です。「そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」。その意味を

訳すると、イエスはこう言ったのであります。あなたが社会で疎外されている人々のために自分の金、名誉などが損なわれても、彼らに仕えているならば、あなたは幸いだ。なぜなら、その弱い人々はあなたに報いることができないからだ。しかし、まったく何の報いがないわけではない。人間からの報いはないかもしれないが、神からの報いが必ずあるのだ、ということです。神という存在を認めるか、認めないかと関係なしに、人間同士でお互いに良い関係を築くことはいくらかでも可能でありました。しかしイエスは、そうした古代社会でも常識的な相互関係、報いたり、報われたりする人間関係に留まることなく、報いのない報いを求めるように教えています。イエスは、人間は神の前で生きる存在であることを明確に認識していました。神の前で、神の子として生きる人々は、それにふさわしい生き方を示すべきです。今日の聖書箇所と同じイエスの考えを示す部分を紹介します。

「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるのか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるのか。罪人でも同じことをしている。返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるのか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさん人の報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（ルカによる福音書6章31—36節）。

イエスが知っていた神とは、善良なる天の父、お父さん、子どもたちの言葉を借りると「パパ」でした。あれだけ愛があふれる神を信じていることを公に言っているにもかかわらず、イエス時代の社会でも、似た者同士だけで仲良くやっているか、そうでない場合でも、互いに差別し、疎外し、弱い者が蔑視され、力ある者が尊重されていたのです。天の父の前で、民族、階級、律法、富、儀式とは一体何なのか。いと高き神の前でそれは、どんぐりの背比べにすぎないものではないか。神は、恩を知らない者にも、悪人にも、つまらない者にも、情け深い。ならば、自分の有益や報いを一切追求せずに、弱い人・貧しい人のために自分のものを費やす人を神は喜んでくれるに違いない。それが本当の天の父の子どもとしての生き方だという意味でしょう。

同志社設立の根底

皆さんにはこのような話が程遠い、ありえない話のように感じられるかもしれませんが、実際、そのような信仰をもって実践する人がいなかったら、この同志社大学は存在しないとわたしは思います。青年新島七五三太が国禁を犯して、日本を脱出し、1年という長い航海の末、アメリカのボストンに着きました。しかし新島には、アメリカから教育を受けたい夢はあったものの、アメリカが一面識もない新島を待っていたわけではありません。パスポートも、お金も、知り合いもない貧しい青年。もしかしたら、そのまま日本に強制送還されても文句を言えない成り行きでした。その時、彼を救ってくれたのが、アルフィーアス・ハーディー夫妻だったのです。ハーディーは、新島がボストンまで航海した船ワイルド・ローヴァー号の船主で、テイラー船長の紹介で新島に出会いました。最初の面談で英語がうまくしゃべれなかった新島は、英文で「なぜ私は日本を脱出したのか」を一生懸命書いて、ハーディー夫妻に見せます。ハーディー夫妻はそ

れを読んで感激し、彼を全面的にサポートすることにしました。新島が通っていたニューイングランド地域の優秀な私立学校のすべての学費や生活費を援助し、新島襄が日本に帰ってから、彼が自由に活動できるように、惜しまずに支援したのです。その中で、新島襄からは何の報いも求めていませんでした。それは、お金もパスポートもなく、英語も自由にしゃべれない弱い青年に対してイエスの教えを实践したことには違いありません。それを知っていた新島襄も、人には何の報いも求めず、キリスト教主義に基づいた大学設立と福音伝道に人生を捧げたと考えられます。見方によりますが、同志社大学の設立は、ハーディー夫妻を含めて、人間からの報いを期待せず、ただイエスに従い、イエスの教えを实践しようとしたアメリカと日本の人々の祈りと活動の結果、神からの報いがあったという面もあるとわたしは考え、信じております。それを認めるなら、同志社大学の一員として、自分にキリスト教信仰があろうが、なかろうが、我々の生き方も見直す必要があるのではないのでしょうか。つまり、自分に何かを返してくれる人だけではなく、返すことができない、報いることができない、日本と世界で疎かにされている人々に目を向け、その人たちに自分がある力、才能、お金を使うことでしょう。

同志社人として生きる

我々が自分のために勉強し、社会に進み出て、我々の友人、家族、同僚と仲良く過ごし、そして幸せに生きること、そこには何の問題もありません。むしろ、現代社会でさまざまな問題や葛藤の中でも、一人の人間として成長したことが褒められるべきかもしれません。しかし、イエスはそれだけでは、神の前で生きる者として、神の子どもとして生きることとして十分ではないと言っているのです。給料、成果、人間関係の高揚と結束など目に見える報いのためではなく、本当に困って、いかなる報いもできない人々のために働くことで、天の父の子として認められる報い、目には見えないものの、より輝かしい報いがあります。イエスは今日の我々にそうした報いのない報いを教えているのです。

最後に、ウォーレン・バフェットとの食事に落札された金額は、バフェット社長に贈られるのでありません。バフェットが支援する慈善団体 GLIDE Foundation に全額寄付されます。GLIDE Foundation はサンフランシスコを拠点にして、貧困問題、社会疎外や差別問題に取り組んでいる非営利組織です。世界で一番高い食事は、報いることができない人々のための食事でもあるのです。

2019年6月19日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録